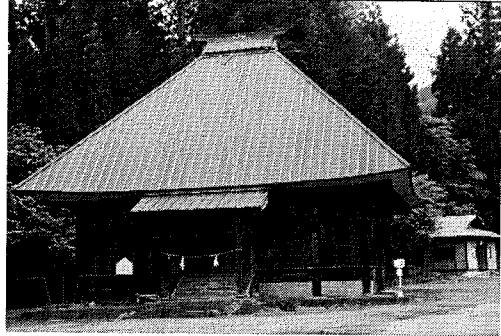


小菅の建造物について

平成 16 年から開始された小菅の総合調査において詳細な調査を実施。平成 26 年に選定を目指す小菅の重要文化的景観保存計画では重要な構成要素として掲げられている。小菅の歴史を後世に伝えるうえで欠かせない建造物である。

講堂に安置されている阿弥陀三尊像は、平成 13 年 11 月 29 日市有形文化財に指定、護摩堂の大聖院跡は平成 15 年 1 月 15 日市史跡に指定。

名 称	概 要	
仁王門		<p>集落入り口に位置する。建築年代は不明だが、天和 3 年(1683)には建立されていたといわれる。金剛力士像が一対安置されている。現在車道は仁王門に向かって右側を走っているが、本来の道は仁王門を通った。門を通るとすぐに悪霊・悪疫、敵の防御の役目とする梅鉢積みの石垣がある。小菅が大聖院を中心とする仏教世界、修験の地であったことを示す重要な建造物である。</p>
講堂		<p>現建物は寛保元年(1714)に再建されたといわれる。内陣には阿弥陀如来坐像が安置される。明治期には一時学校として、昭和初期には公会堂として使用された。神仏混合の影響を受けず、仏像も建物も残され、近世から近代への連続性がみられる。永禄九年絵図には講堂周辺の様子が詳細に描かれており、南大門・中門・金堂・講堂・鐘楼・食堂・荒神などの建物がみられる。内部にはまつり資料館が併設され、毎週日曜日は無料開放されている。神仏混合を示す重要な建造物である。</p>
護摩堂		<p>修験信仰に対応する建築遺構。寛延 3 年(1750)の建立といわれる。内陣まわりの組物などの技法、唐破風内部の彫刻には高度な技術がみられる。かつて護摩堂と大聖院の庫裡は廊下でつながっていたといわれる。柱松行事では護摩焼きをはじめ、神事を執り行う場、行列の出発点となる重要な場所である。</p>

社寺 01 小菅神社仁王門

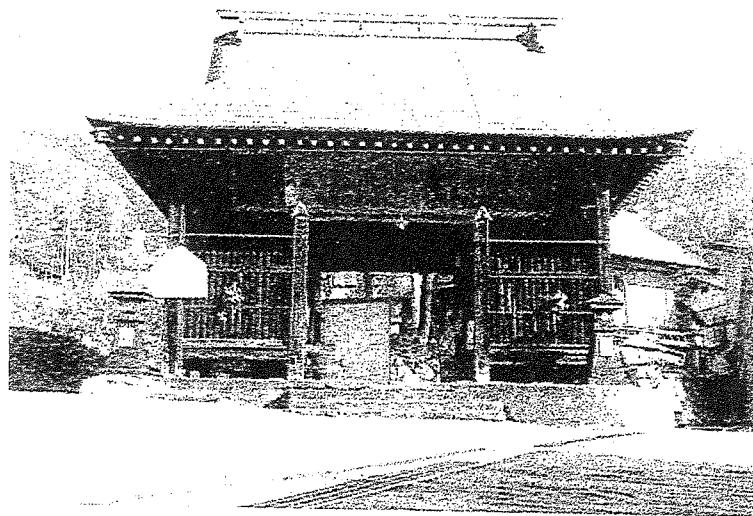
二之鳥居を過ぎ、奥社へつづく参道をしばらくのぼると、小菅集落の入口に仁王像がかまえている。

仁王門の建造年に関する史料は確認できなかったが、17世紀後半の様式をもち、元禄期の建造とされている^{*)}。

参道は仁王門をぬけると梅鉢積みの石垣にみちびかれ、いったん右手に曲折する。これは集落にはいる邪気をふせぐ意味をもっているのだという。しかし、近世以前の絵図面のなかには、参道が仁王門で曲折せず、直線的に描かれているものがある^{**)}。コンクリートに覆われている建物の脚部を見ても、元来、礎石を地表に据えただけの簡易的なもので(写真28)、建物の位置が移された可能性がある。

[梅干野]

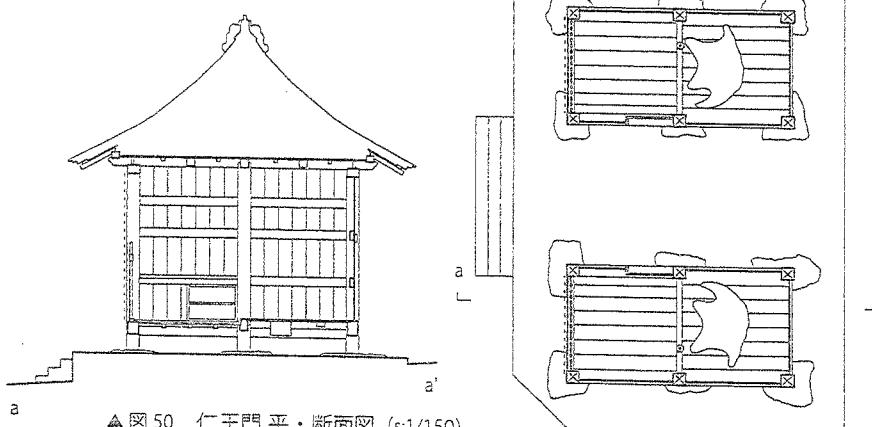
参考文献：1) 信濃建築史研究室編『江戸時代のお宮とお寺』(飯山市教育委員会、1992年) 18頁参照。2) 「永禄九年小菅山元隆寺之図」(小菅神社所蔵)【史料 1-01】



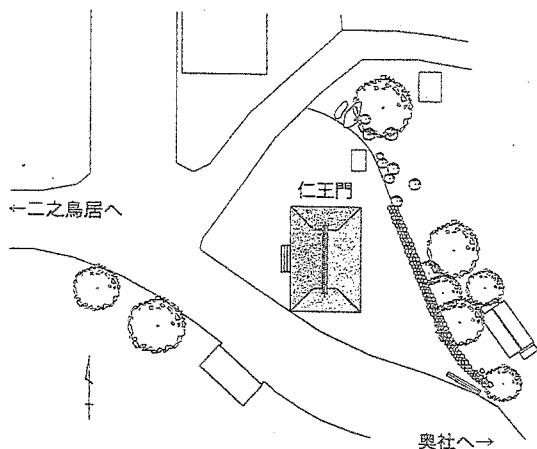
▲写真26 仁王門 全景



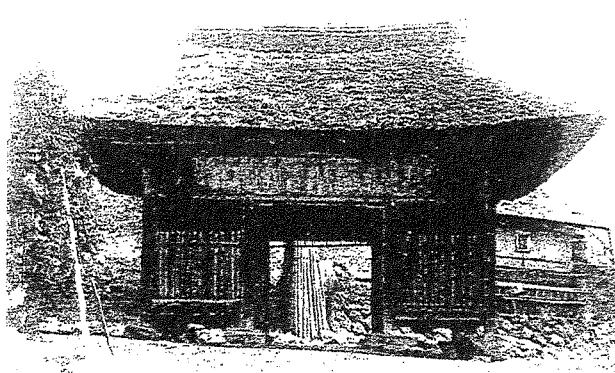
▲写真27 仁王像



▲図50 仁王門 平・断面図 (s:1/150)



▲図51 仁王門 配置図 (s:1/700)



▲写真28 昭和初期の仁王門 磚石がコンクリートにおおわれる以前の姿を写したものである。礎石は地中に埋められておらず、地表に置かれただけの簡易的なものであった。 [梅干野]

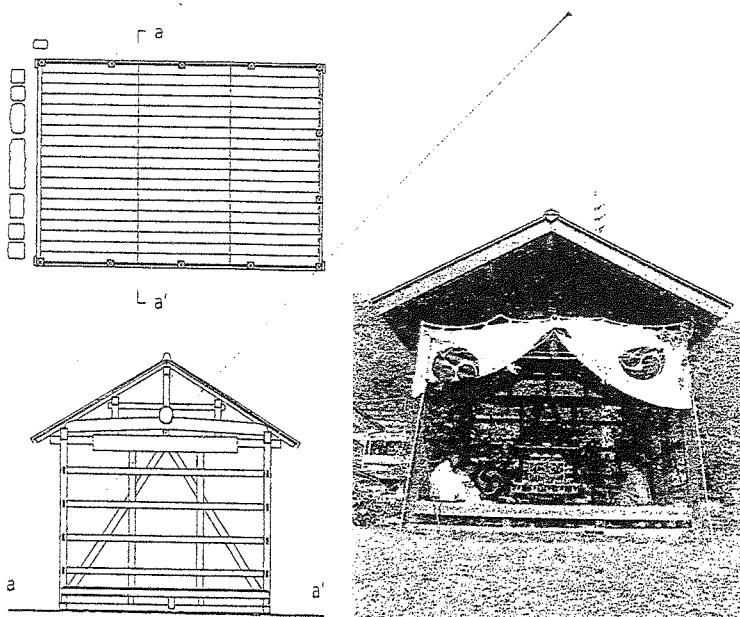
社寺 04 小菅神社御旅所

御旅所は、祭礼の際に神輿が本宮から渡御して仮にとどまるための建築である。建物の脚部は土台建で、神を乗せ移動する神輿と同じ形式である。現在の建物は、明治 19 年（1886）に再建されたものである^{*)}。

奈良東大寺の修二会では、二月堂闇伽井屋に粗朧をはる^{**)}。小菅の柱松柴灯神事でも、御旅所に粗朧をはる（写真 29）。これは神輿に乗って移動してきた神を祀儀として伝えられ、近年まで、参道沿いの民家でも参道と宅地の境界に粗朧をはっていたという。

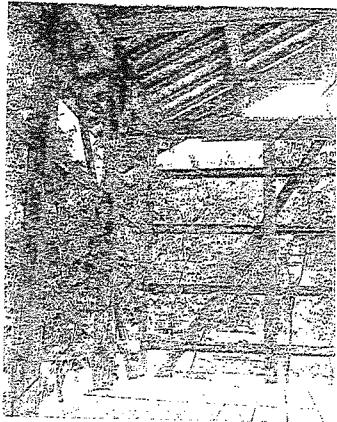
粗朧は神の通りを装飾し、聖と俗をわける結界であったのであろう。 [梅干野]

参考文献：1) 森山茂市『小菅神社誌』（私家版、1931 年）9 頁参照、2) 文化庁『国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻）』（毎日新聞社、1998 年）611 頁参照



▲ 図 59 御旅所 平・断面図 (s:1/150)

▲ 写真 32 御旅所 全景



▲ 写真 33 粗朧をはつた御旅所

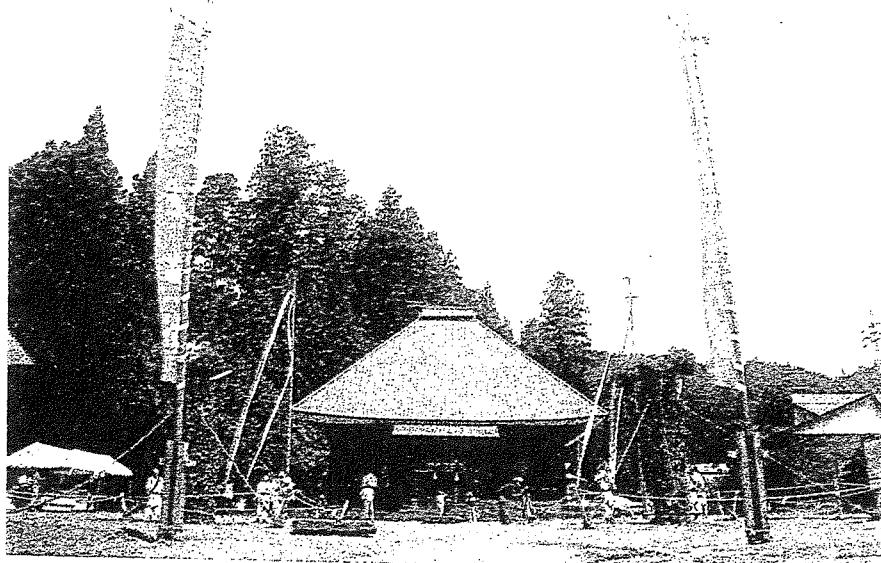
社寺 05 講 堂

講堂は、祭式場に設けられた高さ 1 m ほどの基壇上にたち、内陣に高さ 2 m の莊嚴な阿弥陀三尊像を安置する。

現在の堂は、空心法印の発願で寛保元年（1741）に再建されことが伝えられている^{*)}。また、講堂の本尊である阿弥陀三尊像中尊には墨書きがこされ、享保 17 年（1732）、京都の仏師奥田空之丞によって本尊が再建されたことが記されている。

本尊と堂の再建がほぼ同時期におこなわれており、巨大な本尊を安置するために、講堂を再建したと考えられる。 [梅干野]

参考文献：1) 森山茂市『小菅神社誌』（私家版、1931 年）10 頁参照、2)『中近世の地方山岳信仰に関する調査研究報告書』（元興寺文化財研究所、2003 年）40 頁参照



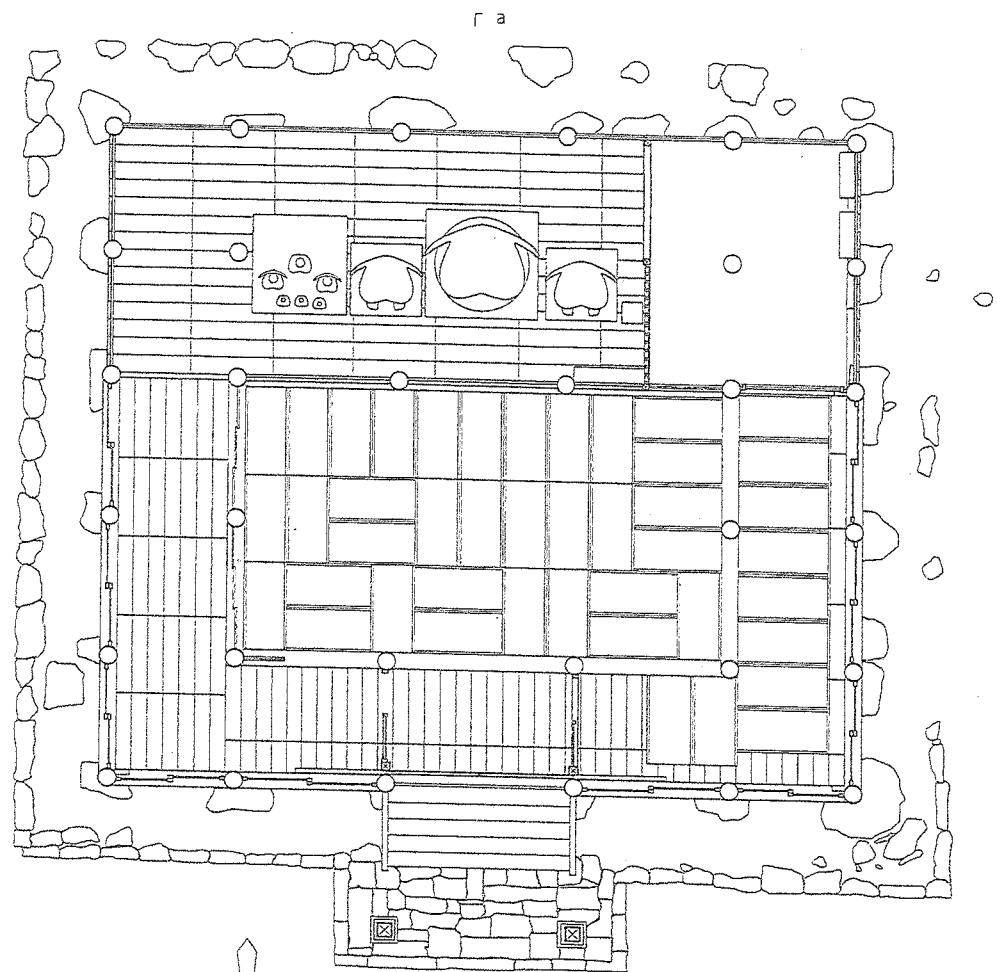
▲ 写真 34 柱松柴灯神事直前の風景 奥に講堂、その両脇に松子がたつ。

講堂の床板にのこる独楽の跡

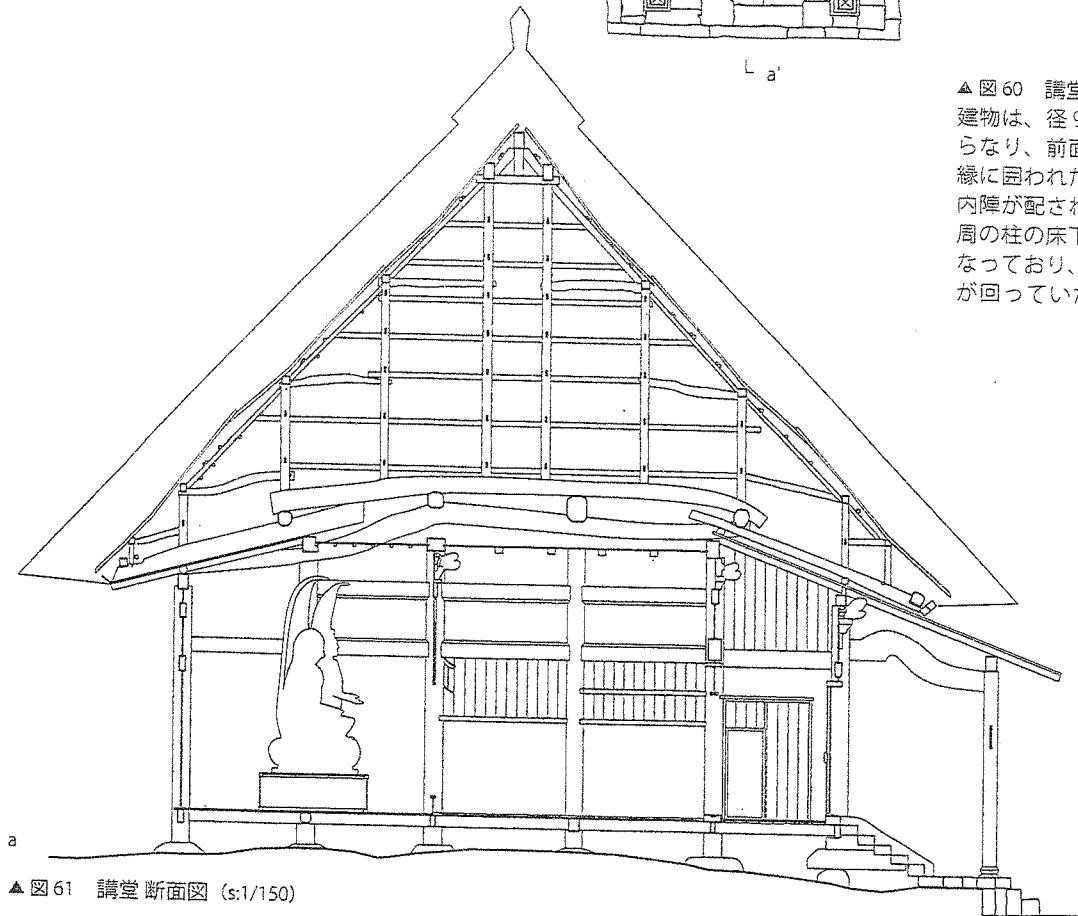
明治時代にはいると、大聖院別当の管理下にあった講堂に廃仏毀釈の荒波が迫った。明治政府より、僧の住まない堂を廃堂とする旨の布告が達せられ、講堂も廃堂の危機に瀕した。

これをうけ、小菅村は講堂と祭式場を村の共有財産することで、この危機を脱したのである。

その後、明治 8 年（1875）から 28 年までの間、小学校として転用され、子供の学舎となり遊び場となつた。講堂の床板には、独楽遊びの跡がいまも生きている。 [梅干野]



▲図60 講堂 平面図 (s:1/150)
建物は、径9寸ほどの丸柱からなり、前面・東1間分の広縁に囲われた外陣と奥2間に内陣が配されている。建物外周の柱の床下部分が6角柱となっており、建設当初は外縁が回っていた可能性がある。
[梅干野]



▲図61 講堂 断面図 (s:1/150)

社寺 08 小菅神社護摩堂

小菅山八所大権現の別当寺であった大聖院の敷地内に護摩堂はたつ。堂は寛延3年（1750）に建造されたことが伝えられている^①。大聖院の庫裏は昭和30年代後半まで存在しており、近年行われた発掘調査によって完全なかたちで礎石が検出された^②。

護摩堂の建物は、前面を外陣とし、内陣の両脇には脇間を配する。脇間の奥には

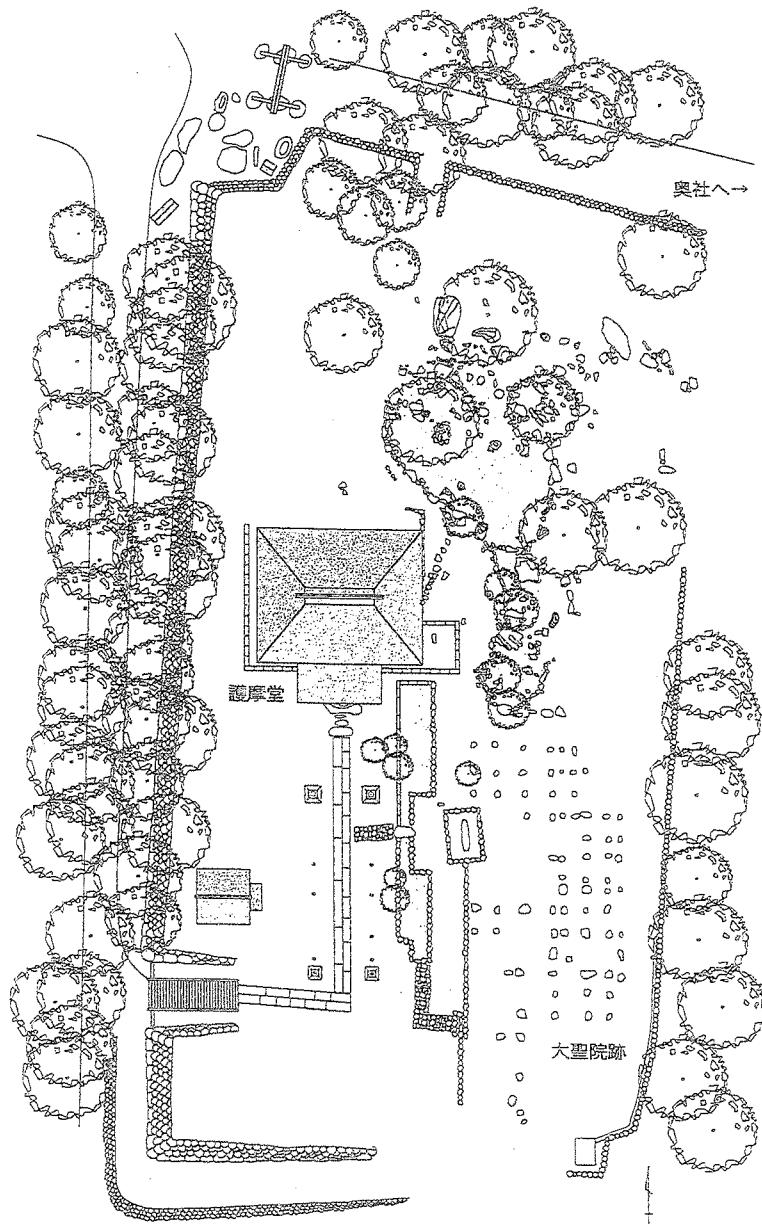
護摩堂の東側から大聖院へと廊下でつながっていた^③。

護摩堂は、護摩を焚くための建築である。内陣中央の床に、護摩を焚いた黒ずんだ痕跡を確認することができる。しかし、内陣上部には護摩による煤跡がそれほどみられないことから、頻繁に護摩は焚かれていなかったと考えられる。

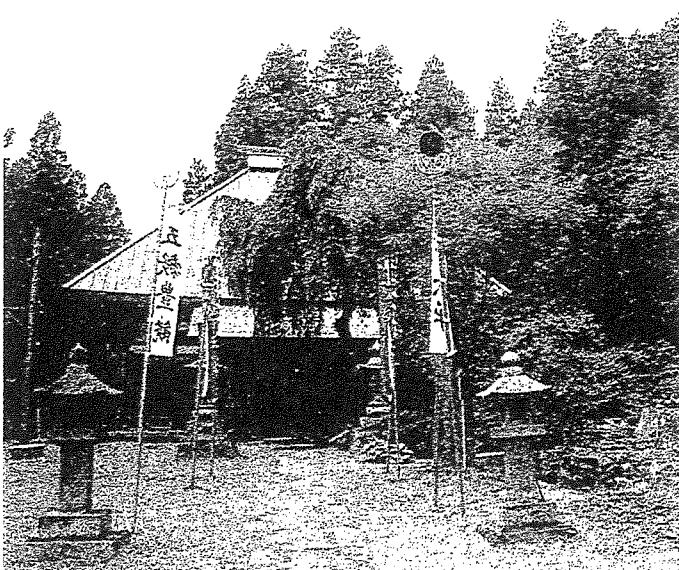
護摩堂の北東には、中世にさかのぼるといわれる庭園がある。この庭園を含めて大聖院の敷地全体を見たとき、庭園と護摩堂の正面性が合致しない。建物内に護摩が焚かれていた痕跡があまり確認できない点や、庭園との位置関係が合致しない点など、多くの疑難をのこす。

〔梅干野〕

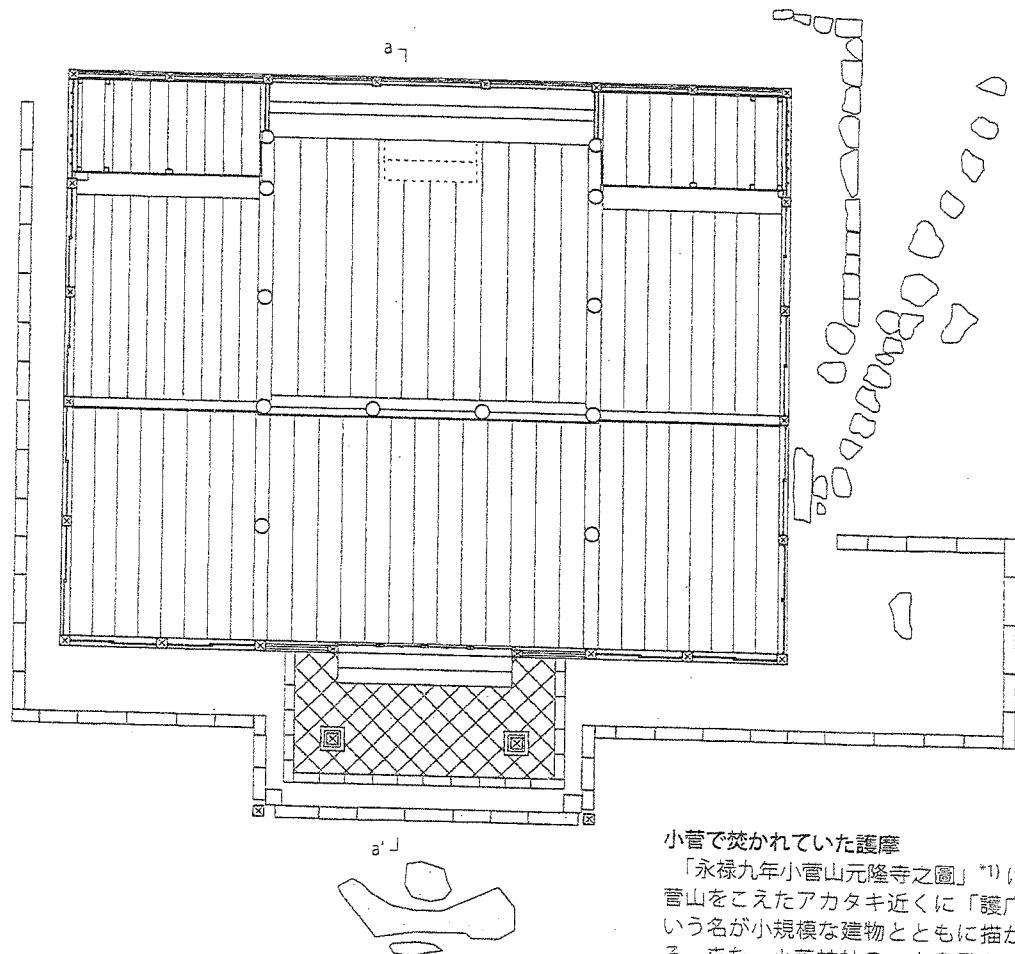
参考文献：1) 信濃建築史研究室編『江戸時代のお宮とお寺』(飯山市教育委員会、1992年) 30頁, 2) 飯山市教育委員会編『飯山市埋蔵文化財調査報告 第69集 市内遺跡・千刈遺跡・小菅大聖院跡・大菅遺跡』(飯山市教育委員会、2002年), 3) 「名称なし(絵図大聖院)」(旧大聖院社家所蔵)【史料1-08】



▲図66 大聖院跡地配置図 (s:1/700)



◆写真41 祭礼時の護摩堂（中央）と大聖院跡（右）



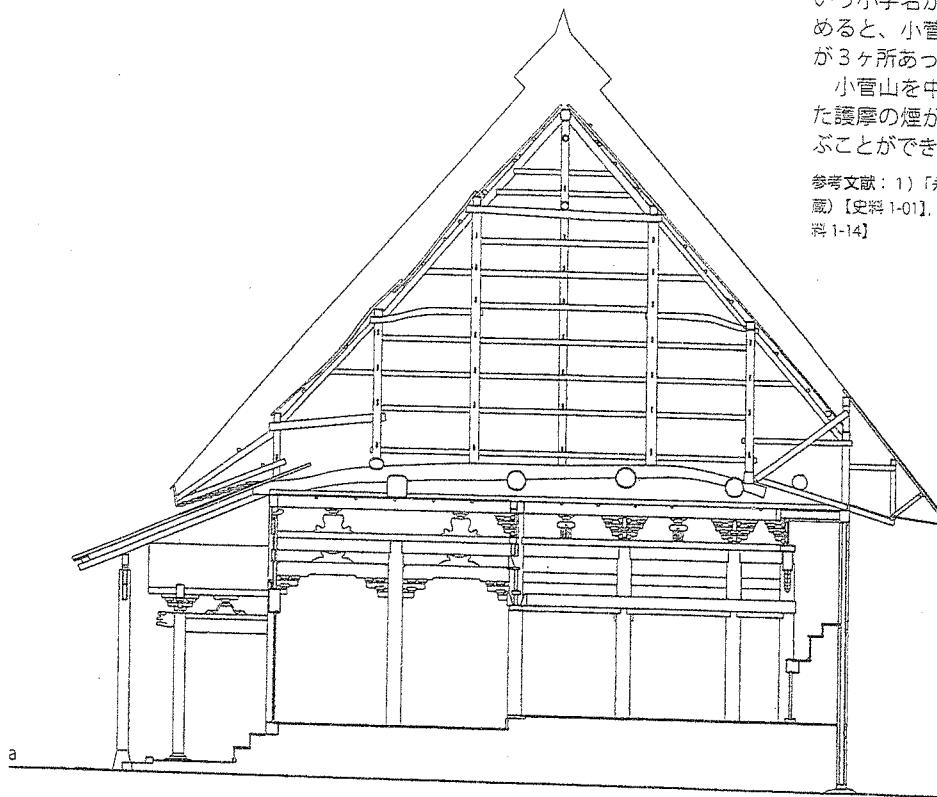
▲図67 護摩堂 平面図 (s:1/150)

小菅で焚かれていた護摩

「永禄九年小菅山元隆寺之圖」^{①)}には、小菅山をこえたアカタキ近くに「護廣所」という名が小規模な建物とともに描かれている。また、小菅神社の一之鳥居と二之鳥居の間に位置する関沢集落にも「護摩所」という小字名が残る^{②)}。これらに護摩堂を含めると、小菅の周辺には「護摩」を焚く場が3ヶ所あったことになる。

小菅山を中心とした修験の道場で焚かれた護摩の煙が、空高くたちのぼる風景を偲ぶことができる。
【梅干野】

参考文献：1)「永禄九年小菅山元隆寺之圖」(小菅神社所蔵)【史料1-01】、2)「飯山市字境図」(飯山市発行)【史料1-14】



▲図68 護摩堂 断面図 (s:1/150)